

# 新年のごあいさつ

齋藤 勝次



新年あけましておめでとうございます。(社)北海道林産技術普及協会会員の皆様には、日頃より頂いております林産試験場へのご協力、ご助言に心から感謝申し上げます。

去年は、ともに木材加工技術や利活用の普及に力を注いできた貴協会が設立50周年を迎え、海外からの講師による印象深い講演会などの記念事業が開催されたことは記憶に新しいところです。

また、カラマツを用いた住宅セミナーが道内各地で開催され、「カラマツは炭<sup>ぶ</sup>の坑木<sup>くわ</sup>・・・」という語り口<sup>かたぐち</sup>を<sup>ふ</sup>拭<sup>し</sup>し、「カラマツは高<sup>たか</sup>断<sup>た</sup>熱<sup>ねつ</sup>・高<sup>たか</sup>気<sup>き</sup>密<sup>みつ</sup>木<sup>もく</sup>造<sup>ぞう</sup>住宅<sup>ていしや</sup>用<sup>よう</sup>材<sup>ざい</sup>・・・」という新たな「21世紀<sup>せいき</sup>材<sup>ざい</sup>」を確保してきたように思えます。これらのセミナーでは、カラマツ林家が自身で育てた木材で建築した自宅などの見学会や、構造材を始めとする建築材料としてカラマツ材の利用可能性の高さをアピールする講演会、パネルディスカッションが行われ、様々な立場の方に強い印象を与えています。道内のカラマツ林の蓄積が9,000万<sup>まん</sup>m<sup>3</sup>に達する時代の力強い流れだと歓迎しておりますが、当场がこれまでカラマツに関して長年にわたって取り組み蓄積してきた多くの研究成果や技術がこの中で生かされていることを確認できます。今後とも、建築材料としてのカラマツ利用がさらに発展するよう積極的に研究を進めてまいります。

林産試験場では、昨年春に本道森林資源の利用・木の生活文化の発展を目指し、道民の豊かな生活に貢献して本道の木材産業を積極的に支援していく役割を担うために、試験研究の方向性や普及指導業務の実施方針となる「林産試験場中長期ビジョン」を改定しました。現在、同ビジョンを実現するためのアクションプランを作成していますが、その主な考え方のひとつとして、研究から実用製品化までの期間の短縮を目指して、技術力のある企業、あるいは新技術を求める企業との共同研究体制の構築を図っていくことがあります。このことにより、試験研究業務に加え、企業等への技術支援や研究成果の普及活動をよりスムーズに展開できると考えています。

道内の輸入材依存率が製品類も含め約60%となっている一方で、人工林の蓄積が確実に進んでおります。また、最近では中国の木材輸入量が増大するなどの動きもあり、本道の木材産業構造への影響や製造分野の空洞化も進むことが考えられることなど、木材産業をとりまく情勢は変わってきております。林産試験場といたしましては、こうした木材産業が置かれている状況・背景の洞察に努め、人工林材の利用分野の拡大、あるいは木材産業の体質強化をはかるための技術の開発など、今年も引き続き、本道の森づくりの推進や地域木材産業の発展のために、試験研究とその普及、技術支援に努めてまいりたいと考えております。

最後に、今年の貴協会会員の皆様のご多幸、ご繁栄をご祈念申し上げてごあいさつとします。

—北海道立林産試験場 場長—